

文部省選定

—— 伝統芸能の粹 ——

日本映画ペンクラブ推薦
優秀映画鑑賞会推薦

狂言師・三宅藤九郎



作 品 名・シリーズ——伝統芸能の粋——
「狂言師・三宅藤九郎」
(35ミリ・カラー・32分)

企 画・財団法人ポークラ伝統文化振興財団

製 作・株式会社日経映像

出 演 者・三宅藤九郎
和泉元秀、元彌、祥子
安藤常次郎、黒川能保存会

製作スタッフ・プロデューサー・六鹿英雄、小谷田 亘

脚 本・監 督・吉田喜重

撮 影・高畦幸一、小沢健次

照 明・水村富雄 音 楽・一柳 慧 題 字・矢萩春恵

ナレーター・伊藤惣一 編 集・武田幹夫、井上正司

録 音・梅林一夫 撮影助手・大木大介 演出助手・有泉 寧

協 力・文化庁文化財保護部
国立劇場 能楽堂



明治、大正、昭和の3代を、一介の狂言師として生きてきた三宅藤九郎。その芸は、兄の故野村万蔵について人間国宝との評価を得ている。

5歳の初舞台から今日の83翁まで狂言一筋の道。それは、常に芸に対する執念と根気に支えられた厳しいものだった。狂言は品位の低い芸、能に付随するもの、などと貶められ、陽の当ることの少ない存在であった頃から、狂言を能から自立させ、狂言の格を主張するためにひたすら芸を磨き続け、また、新作狂言の創造や、廃絶された秘曲の発掘上演など、意欲的な舞台を勤め続けてきた。

彼は「狂言師は上達すればするほど、安全な道を選んで能に近づく」という。そして「しかし狂言は、危険であっても能と芝居とのちょうど中間、いうなれば崖っぷちのきわどい道をぎりぎり歩むもの」と語る。これは、俗なる物真似からいでて、聖なる道化ぶりを演ずる狂言師の自負であろうか。

自分の芸を後世に残すのであればと、彼自身が選んだ演目は「木六駄」「靱猿」「腰祈」「川上」であった。

九世三宅藤九郎・年譜

- 明治34年 3月18日五世野村万造の次男として生れる。
- 明治38年 「靱猿」の猿にて初舞台を勤む。
- 大正14年 よいや会で「蚤武者」自作自演。以後自作自演10数曲に及ぶ。
- 昭和11年 三宅家を継承し、三宅万介と称す。
- 昭和14年 和泉流宗家家格・三宅本家名、九世三宅藤九郎を襲名。
- 昭和18年 長男保之、和泉流十九世宗家となり、その後見となる。
- 昭和20年 社団法人能楽協会設立に際し、役員となる。
- 昭和24年 「和泉会」設立。第1回「和泉会」開催。以後現在まで継続。
- 昭和34年 狂言第一の秘曲「狸腹鼓」を勤む。
- 昭和36年 芸術祭奨励賞受賞(「煎物」)
- 昭和37年 芸術選奨文部大臣賞受賞(「児流鎬馬」)
- 昭和39年 渡米。アメリカの各大学にて公演。
- 昭和42年 日本大学芸術学部講師となる。
- 昭和43年 メキシコ、アメリカ各地を巡演。
- 昭和44年 芸術祭優秀賞受賞(「無布施経」)
- 昭和46年 勲4等瑞宝章を受章。芸術祭大賞受賞(「靱猿」)
- 昭和54年 重要無形文化財「狂言」保持者に認定される。



能楽・狂言について

狂言は平安時代の猿楽の系統で、中世に至って能との組みあわせによって、互いに影響しあいながら発展・完成した。

歌舞的な要素をもつ能とは違って、狂言は科白せりふを中心に滑稽な物真似を主とする、明朗洒脱な芸能である。

歌舞伎狂言をはじめ、人形浄瑠璃その他の近世芸能に少なからず影響を与えた。現在においても、それ自体高い水準の舞台芸術として広く愛好されている。

狂言方は、現在「和泉」、「大蔵」の2流がある。

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

財団法人 **ポーラ伝統文化振興財団**

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597